

看護研究における尺度活用の意義

今この本を手に行っているあなたは、研究に興味があるとか、看護研究をしてみたいと思っている方だと思います。むしろ、すでに看護研究に取り組まなければならない状況に追い込まれているのかもしれませんが。

それでは、看護研究とはどのようなことをいうのでしょうか。看護研究は現場で実際に起こっている看護の現象を客観的な手法を用いて、ひもといていく方法であり、その結果は次の看護実践の裏づけ、いわゆる「エビデンス」といわれるものになります。

〈看護ケアは「学問」を基盤に発展してきた〉

看護研究は、看護実践における質向上の社会的要請の高まりに対応するため、近年盛んに行われてきています。その背景には、看護ケアの知識と技術が「学問」を基盤にして発展してきていることを広く理解してほしい、また看護学を科学として価値づけ、継承していきたいという看護界の長年の熱き思いがあります。

そこで、多くの看護系大学の教育課程では、重要な教育科目として、卒業研究などの研究に関する科目を開講しています。なぜならば、看護は「実践の科学」といわれますので、看護実践を通して先駆的な研究を推進できる研究能力を有する人材の育成が期待されているからです。看護系大学では、まず看護を実践するために必要な知識・技術を習得することが求められ、3年生の後半からは臨地実習によって、学習の統合と判断力が育成されます。特に、研究能力を有する看護職となるために、卒業研究の過程のなかで、研究テーマの絞り込み、文献検索の重要性、研究計画を立案することの難しさを学習し、「研究に王道はない」といわれていることを体感することが求められています。具体的な研究方法などの看護研究の基本的なプロセスを学ぶとともに、なぜ看護の研究をしなければならないのか、研究成果を看護実践に活かす必要性についても学習することがシラバスで計画されています。卒業後は、卒業研究での学習成果を活かし、将来は高い看護実践能力・指導能力・研究能力をもった研究者、あるいは教育者や指導者として活躍すること

などが期待されています。

〈看護実践者による研究がもつ課題〉

これまでの多くの看護研究は看護実践者によって行われていました。しかし、看護実践を重視してきたこれまでの教育課程では、研究に関する教育が不十分で、系統的に研究の学習を積み重ねたとはいえない状況でした。

最近では看護系大学に所属する研究者や教育者による看護研究が増え、その結果、研究手法も研究課題も多様化しました。近年、看護研究に関する書籍も多く発行されています。

これまで看護実践者による研究は、研究方法などの研究に関する基本について指導を受けながら研究を行う場合が多く、研究手法も質問紙による調査研究が大半を占めていました。質問紙調査方法は、研究目的に応じて客観的な情報を数的に得られるという特徴をもった優れた研究手法ですが、一方で、その調査用紙次第で研究の良し悪しが決まります。

この質問紙調査研究において、調査用紙に既存の「尺度」を活用する研究手法が注目されてきています。尺度は明らかにしたいことを測るためにつくられた、いわば道具であり、ものさしでもあります。さらに、研究だけでなく、看護実践の状況把握や実践能力を高める要素としても尺度活用の可能性は高くなると予測されます。尺度は信頼性・妥当性などの精度検証を丁寧に行って開発されています。尺度を活用する場合は、尺度の開発目的をよく理解したうえで適切に活用することが最も重要となります。そして、目的にかなった活用をして得た結果は、看護の重要なエビデンスとなります。

既存の尺度を活用した看護研究は、今後ますます活発になっていくと推測されます。しかし、信頼性・妥当性などの精度検証に乏しい尺度を活用した場合や、研究目的に合致していない測定概念の尺度であるにもかかわらず安易に活用した場合は、むしろ信頼を失う研究結果となるので、尺度の活用を慎重にすることが求められます。

〈尺度を正しく有効に活用して研究を行うために〉

そこで、これまで多く出版されている看護研究に関する書籍ではなく、「尺度を正しく有効に活用して研究を行う具体的な副読本」が必要と考え、本書を刊行することにしました。

本書は研究の原理原則や基本的な方法論を学ぶために企画されたものではありません。研究の方法論を学習したい方は、まずこれまでの看護研究に関

する多くの書籍に基づき、さらにチャンスのある方は研究者の指導も受けながら学習していただきたいと思っています。

本書は、尺度活用の有効性を聞きつけた看護実践者から、「尺度を使いたいが、どのような視点で選定したらよいかわからない」「よい尺度とはどのようなものなのか知りたい」「尺度を使って調査をしたが、どのように分析したらよいかわからない」などの質問を受けることが多くなってきたので、その要望に応えるために実践書のような形式にしています。また、看護実践者が多忙な業務のなかで時間を割いて実施した看護研究が、エビデンスとしての価値を認められない脆弱なレベルに終始していることや、それが常態化していることも否定できない現状を打破し、一步一步と歩みを進め、看護研究の価値を高める一助になりたいという狙いもあります。

また、今後看護系大学院の増加に伴って、看護学領域で活用できる尺度の開発がますます加速するであろうと予測されていますが、看護研究を行おうとしている多くの看護実践者が、難しい専門書を理解できず、そのためうまく活用もできずに模索している現状にあるのではないかと心配しています。繰り返しになりますが、看護研究領域での尺度の開発方法や選定方法や活用方法をわかりやすく平易に簡潔に示した書籍の必要性を強く感じ企画された本書が、尺度の理解と活用を推進し、さらには看護研究への興味や関心を高め、その取り組み促進の一助となることを期待しています。